



2024年は9月22日、秋分の日



秋分の日とは太陽が真東から昇って真西に沈み、昼と夜の長さがほぼ同じになる日で、彼岸の中日です。秋分の日は例年9月23日ごろで、秋分の日の正確な日程は、毎年2月1日に国立天文台が作成する「暦象年表」に基づいて閣議で決定されます。そのため、必ずしも9月23日が秋分の日であるわけではありません。その年のなかで昼と夜の長さがほぼ等しくなる日を、春は「春分の日」、秋は「秋分の日」とそれぞれ定めていますが、天文学に基づき祝日を決定することは、実は世界的に珍しいそうです。

秋分の日の由来は・・・

もともと農村部では、春分の頃に豊作を祈り、秋分の頃に豊作を祝う自然信仰があり、山の神様である祖先の霊を春分以前に山から里に迎え、秋分以降に里から山へ送るという儀式が行われていました。

しかし、仏教の浸透とともに秋分は「秋の彼岸」として祖先を供養する意味を持ち始めました。1948年には、お寺参りの日・先祖供養の日など、宗教的慣例としてのまつりの日だけではなく、広い意味で「祖先を敬い、亡くなった人を偲ぶ日」として国民の祝日に制定されました。

「暑さ寒さも彼岸まで」という有名な言葉があります。

暑さ寒さも彼岸までとは、夏の暑さも冬の寒さも、春秋の彼岸を境として次第に薄れていき、それ以降は過ごしやすくなるという言い伝えです。この頃になると、過ごしやすいく気候になっていきます。

秋のお彼岸～彼岸とは？



お彼岸は年に2回あります。1つは春分の日にある「春彼岸」、もう1つが秋分の日にある「秋彼岸」です。

秋分(春分)の3日前を「彼岸の入り」といい、3日後を「彼岸の明け」と言い、その7日間を彼岸と言います。

秋分(春分)はその中間に位置するため「彼岸の中日」と呼ばれています。

そもそもお彼岸の「彼岸」とは、亡くなったご先祖さま達の霊が住む世界で、反対に私たちが生きている世界を「此岸(しがん)」と言います。

仏教の考えでは、彼岸は西にあり、此岸は東にあるのだそうです。

春分の日と秋分の日、太陽が真東からのぼり真西に沈みます。そのため、彼岸と此岸の距離が最も近くなり、ご先祖さまと私たちが通じやすい日と考えられたことから、お墓参りに行ったり仏壇に手を合わせたりするなど、ご先祖さまを供養する日となりました。



秋分の日の行事食「おはぎ」



彼岸の中日である秋分の日には、おはぎを食べる習慣があります。

その由来は諸説あるようですが、1つは、小豆の赤には邪気を払う効果があるとして先祖に供えられたのがきっかけというものです。おはぎに使われる砂糖はかつて貴重とされていたため、特に江戸時代の庶民にとっては、贅沢な一品でした。

このことから、おはぎは先祖にお供えする上等な品、そして邪気を払い健康を祈願する意味でも、お彼岸の行事食となったようです。

そもそもおはぎの名前の由来は・・・



秋の植物である萩。萩の花が、小豆の粒によく似ている様子から「御萩餅」と呼ばれていたそうです。そのうちに餅が取り払われ、「おはぎ」とひらがなで表現されるようになったそうです。

春分の日に食べられるぼたもち。おはぎとよく似ていますが、漢字で書くと「牡丹餅」。春に咲く牡丹の花が、小豆と形がよく似ていることが起源だとされています。

